



緑爽会報 NO.110
 '12年7・8月合併号
 発行
 公益社団法人
日本山岳会 緑爽会
 ☎ 03-3261-4433
 事務局 松本恒廣 近藤雅幸
 夏原寿一 川口章子
 近藤 緑 横山 隆
 渡部温子

講演&暑気払い、和やかに終わる

炎暑の7月19日、緑爽会恒例の暑気払いが開催された。ひさびさに国見利夫元代表も顔を出され一同大歓迎だった。差し入れの酒やお菓子が並び、用意した弁当のほか渡部・川口さんの手料理に加えられた尾野益大四国支部長から届いた鳴門わかめのサラダも好評だった。講演「棟方志功と立山」(五十嶋一晃会員)については次号に掲載を予定している。



国見利夫さんを囲んで記念撮影 撮影 夏原寿一

【緑爽会9月山行】小 檜 山

期日 9月25日(火) 日帰り(雨天中止)
 集合 塩山駅改札口 9時30分
 高尾発8:02 塩山着9:25 甲府行
 コース 塩山駅(タクシー)→焼山峠
 →一杯水→小檜山→小檜峠→父恋し
 道分岐→オチャドビレッジ・フフ
 (タクシー) 塩山駅
 歩行時間 4時間強 地図 川浦、塩山
 申込期限 9月18日(火) タクシー予約
 ◆係 夏原寿一 ☎03-3710-5059
 F 03-3710-5120 当日 090-9109-0622

◆鼎談「深田久彌を語る」
 今なお衰えない『日本百名山』の人気。身近な人たちがその著者の素顔を語ります。
 日時 10月4日(木) 18時30分
 場所 日本山岳会104号室
 講師 深田森太郎(久彌長男・緑爽会々員)
 藤本 慶光(前副会長)
 大森 久雄(ジャーナリスト)
 知人・友人、どなたでもお誘いください。
 問合せ 松本恒廣 ☎03-3326-2892

秋の講演会のご案内

【参加者】田村佐喜子・国見利夫・羽田栄治・梨
 羽時春・松本恒廣・菅野弘章・近藤緑・里見清
 子・渡部温子・横山隆・鳥橋祥子・川上進・島
 田稔・夏原寿一・田井具世・川口章子・中尾千
 予光/南川金一・布川欣一
 講師 五十嶋一晃 計20名

「中央稜」初登攀 宮沢さんのピッケル展示

南ア登山の変遷たどる

南アルプスと人の関わりを紹介する企画展「南アルプスの登山史を語る(南アルプス月北岳パットレスの難ル)」。山と渓谷社「山梨目新報社」山梨放送。当時、雲霧を抜くために宮沢社、山梨目新報社、山梨放送。当時、雲霧を抜くために宮沢社、山梨目新報社、山梨放送。

きょうから芦安で企画展

共催が16日から、同館で始まる。南アルプスの登山史を伝える貴重な資料が並ぶ中、ひとくち目を引くのが今から60年以上前、北岳の山頂東側のパットレス(大岩壁)の難ルピッケルは全体が金属製だが、宮沢さんのものは、木製が使っていたピッケルだ。

宮沢さんは長野県小谷村出身。「風雪のピバーク」の著者。企画展は来年5月31日まで。

宮澤憲さんのピッケル、南アルプス芦安山岳館へ

緑爽会報108号掲載の宮澤美渚子さんの「セピア色の写真」に反響があった。山岳ジャーナリストの大森久雄さんが目にとめたのは、北岳中央稜パットレス初登攀をめぐる松濤明と同伴者宮澤憲との隠された真実。『風雪のピバーク』が一人歩きした陰に安川茂雄の意図が見えると書いた後記も「いい視点だ」と認めてくださった。

たまたま芦安山岳館が企画展「南アルプスの登山史を語る」を準備しているとの情報を得て、塩沢館長に緑爽会報と宮澤憲著『ヒマラヤ一つの峰の物語』を添えて検討を依頼した。館では早速文献を調査したりしい。憲さんの遺品のピッケルを展示の目玉にしたいと言ってきたのは、6月15日のオープンまであと数日という慌ただしさ。早速宮澤家に伺い、凶器のピッケルの梱包に大汗をかいて宅急便で送り出し、何とか展示に間に合わせた。

これまで「同行者M」とされて無視されてきた憲さんのピッケルが、一周忌を前にして北岳に近い芦安に所を得たことで、美渚子夫人もさぞ安堵されたことと思う。なお、山崎安治編『日本登山記録大成』には同伴者名も明記してある由。「さすが」と思った。(K)

宮下啓三さんを偲ぶ会

急逝されて3ヶ月余り。「偲ぶ会」のお知らせです。
 期日・場所 10月1日(月) 18時
 慶応義塾大学三田校舎内
 ファカルティー クラブ
 会費 1万円
 申込 9月15日までに松本まで。
 ☎03-3326-2892
 この会は、三田文学会・独文科同期会・体育会山岳部及び日本山岳会有志の共催で行われます。

自然保護全国集会支援事業(委員会&緑葉会共催)
東日本大震災被災地

「慰霊と支援の旅」

近藤 緑

自然保護委員会で、今年のテーマを「尾瀬を考える」と決め、尾瀬戸倉で開催することになったときから、私はこのバス旅行を考えていた。「なぜ、いま、尾瀬が問題なのか」と言えば、昨年、3月11日の大震災と大津波によって福島第一原子力発電所が破壊され、放射性物質による周辺への影響が広範囲に及んだことから、東京電力としては今後その補償問題に追われ、従来どおりの尾瀬の管理費は出せないと表明したことに始まっている。

それならまず、震災の爪痕の残る宮城・福島を視察してから尾瀬に行こうではないかと提案それを支援事業にすることを主張した。自然保護委員の主要メンバーの何人かは緑葉会々員であり、今年の実行委員長が緑葉会事務局の川口章子さんに決まったということも、私を強く揺り動かしたことは間違いない。

はじめに

かつて全国PTA研究会という民間の教育団体があって、官制の日本PTAとは違った在野の教育運動をしていた。初代代表は戦後民主教育の指導者であった宮原誠一東大名誉教授で、先生の死後は高弟の室俊司立教大教授が継いだ。会員の多くは教師と父母で、月刊「PTA研究」を発行し、研究講座を開き、年に一度は日本教育会館で全PTA大会を開催していた。

PTA広報を皮切りに編集に興味をもった私は、神奈川県下の団地から東京に転居すると同時に「PTA研究」の編集を手伝うようになり、お陰で各新聞社の教育担当記者とも知り合う機会があった。ジャーナリズムでは樋口恵子、俵

萌子、水畑道子といった女性評論家が論陣を張っていた時代だった。舞台で脚光を浴びる人たちとは違って、私は裏で集会のPRや人集めに腐心していた。30年前、私が実行委員長で日本教育会館大ホールを満員にしたときの達成感忘れられない。時代の風潮と多くの協力者があつての成果であつたことは言うまでもない。同志の多くが、散つて行き、世を去つた。今や、私や川口章子さん、鎌倉淑子さんは、数少ない全PTA研の残党である。大きな集会を開催するためのノウハウを多少は知っている。企画するに当たっては、人が今、何なら動いてくれるかを、まず考えることだ。

「慰霊と支援の旅」を全国集会のプレスタディとして位置づけてもらったが、実行委員会の中心メンバーには本務の「尾瀬集会」に専念してもらいたいと、バス旅行の運営に関しては別の有志を募ることにした。全PTA研時代に国見利夫(元緑葉会代表)さんと始めた「自然と人間の暮らしを考えるフォーラムIN」の仲間、現在も付合ひの続いている人々に協力を呼びかけてみた。傘寿を迎える私からの頼みでは断れない向きもあつたらう。何人かの賛同者に恵まれたことで、これなら行けると確信をした。

まず、バス運行の世話役には、昨年秋の姨捨山行きで実証済みの里見清子さんが最適とお願した。甲府ワンドラーのリーダーとして並みの添乗員に負けない経験を積んでいる。

被災地の案内役には、旧知の新聞記者、渡邊豊記者に依頼した。東北大学出身で毎日新聞社定年後に塩竈支局勤務を希望して赴任、昨年の大地震に遭遇して九死に一生を得ている。打診すると「ぜひ来てください。現地の人はこのまま世間に忘れられることが一番つらいのです」と、快諾してくださった。

同じく現地協力者として宮城支部柴崎徹会員、

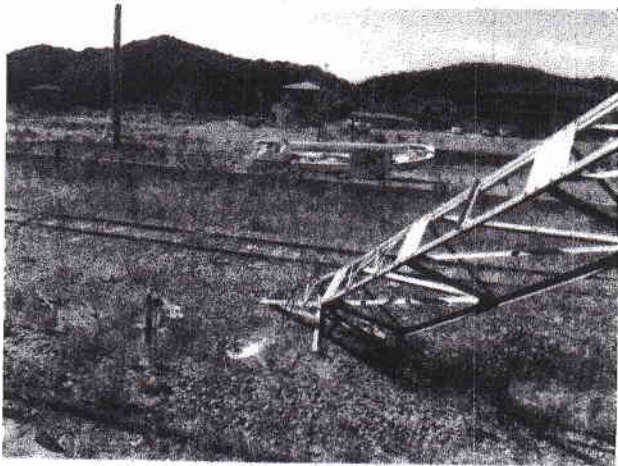
福島の花菱俊和会員、山形支部佐藤淳志会員らに声をかけた。特に「支援の夕べ」のことは、江花さんに会場や人集めのことで、多大なご尽力をいただいた。心から御礼申し上げます。

ひたすら走つた一日間

6月29日7時50分 予定通りバスは新宿を出発した。今回は、プレスタディとして尾瀬集会と窓口を一つにしたので、全国各地からの参加者で、ほぼ満席状態だった。

川口JICから東北自動車道に入り、バスは順調に走ってくれた。長い車中も退屈することは無い。一通り自己紹介した後は、心得た常連の方々が登場して下さる。

まず北海道から参加の新妻徹(元支部長)さん。母校北大の寮歌「都ぞ弥生の」百年祭を語り、伝統の寮歌を唱ってくくださった。一高・三高と旧制高校自体が遠くなった現在、札幌では子どもまでがこの歌を歌うと聞いて楽しくなつた。「羊群声なく牧舎に帰り」という漢語調の歌



野蒜駅付近の惨状

詞をどんなイメージで捉えているのか。正調「都ぞ弥生の」を披露する新妻さんは青年の昔に還つたようだった。80を超えて冬山にも行くという人だから、年寄り扱いは失礼かもしれない。

仙台南から荒浜方面に向かう。津波の塩害で不毛となった田畑が車窓に広がる。ここで、緑友の中里律子さんから「子息が続けている」「七里ガ浜発七ヶ浜復興支援隊」の話を聞く。美しい七ヶ浜が津波で壊滅、名前が似ているところから鎌倉七里ガ浜が毎月支援隊を出している。息子夫婦が支援に出かける間、孫の面倒を見に行くという中里さん。彼女自身、松島出身というから災害は他人事ではなかったのだろう。

利府中JICを出たところで、かねて申し合わせてあつた宮城支部柴崎徹会員、秋田支部福田会員と渡邊記者が乗り込む。ガイドが揃つたことで一安心。地元記者の誘導で、バスは塩竈市内を回り、松島へ。湾内と外洋とで被害の大きさが違うことをまざまざと知った。「このことを知つていて政宗は、松島に瑞巖寺を建てたのでしようか」と、終了後に感想を書いたのは、同じく緑友の森達男さん。

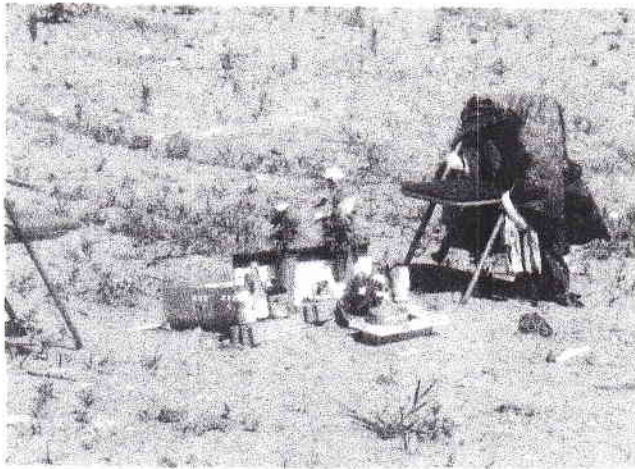
仙石線野蒜駅で小休止。仙台と石巻を結ぶこの鉄道は、今も不通のまま復旧のメドはたつていない。駅舎やプラットホームが空しく残る周辺には、半壊状態の商店や家屋があつた。海岸へとバスを回す途上で、空き地に台や椅子をおいて、生前の衣類を掛け、花を飾つた供養台があつた。その生々しい光景に、一瞬皆の顔色が変わった。その昔、沿岸航路を避けて物資を輸送したという運河を渡り、堰堤に立つと、海岸沿いにはるか石巻方面が見渡せた。

石巻はかつて緑友会々員だった森佐和子さん(故人)が誇りにしていた街だった。「石巻には乞食はいない。箸と塵取があれば生きていける」と言っていた。港で俵からこぼれた米を集め、魚を拾えば飢え死にすることはないというのが

自慢の種だった。その石巻の大災害を知らずに彼女が早世したことは、せめてものことだったかもしれない。心の中でご家族の無事を祈って再びバスに乗り込む。

午後3時。残念ながら今日の視察はここまで。野蒜ICから高速道路を走って、一路、会津猪苗代へ。宿舎、猪苗代観光ホテルで今頃は、直行した出演者たちが「支援の夕べ」のリハーサルをしていることだろう。そのお世話を地元の江花さん、また、車で先行した渡邊・下野両自然保護委員がしてくれているはずである。予定通り7時に開演できるだろうか。もし、お客が集まって、本隊がまだ到着しないとなったら、どうしよう。気持ちは焦るが、そこは安全運転でバスに任せる以外ない。

お願いしたい。観光バスのドライバーは遠藤さん。前回秋田の全国集会でお馴染みである。急がず、慌てず、無理のない走行で、確実に決まった時刻に目的地に着けてくれた。



花を飾り、衣類を掛けた供養台

「負けるな 福島」の夕べ

7時開演。7時半にディナーショウを始める予定だった。6時過ぎにバスは宿舎に着いたので、要領よく風呂浴びた人も多い。「浴衣でもいいか」と聞いてくる人もいたが、お客さまに失礼だからと断った。靴は？と言われると、登山靴の人が殆どなので、スリッパも可と答える。猪苗代町長、同議長と、いずれも代理ながら忙しいなかを来てくださるだけでも有難いことである。歌手の山澤直子さんと関りがある野口英世記念館からは、二人の方が見えた。

会場に入ると、ステージに向かって丸テーブルが九つ、配置してある。会食はオーソドックスに式にした。30分の時差をつけて「支援の夕べ」に参加する地元の方々も入場されることになっている。

大船実行委員長の司会・進行で来賓の挨拶などが終わり、乾杯だけのお酒が尽きる頃合いをみてディナーショウが始まる。会場がタテ長なところから、音響の専門業者をお願いした。お陰でどこにいても声は届いて、カラオケも生演奏と変わらない効果をあげた。

出演者の山澤直子さんは、かつて藤野や、忍野村の集会でも歌ってもらったことがある。その頃は、音大を出たてのソプラノ歌手だった。その後、金子みすゞの詩に出会い、その歌曲を歌うようになってから歌手として大きく成長した。今では日本人の情感に訴える歌をしみじみと聞かせる大人の歌い手として活躍している。今回は彼女を中心に朗読や歌のほか、お馴染みの東京インターアーツの牧原くみ子さん(箏)高橋章子さん(フルート)、劇団芸協の福井緑さんにマンドリンの岩崎早苗さんが、福島支援ということで進んで協力してくださった。

曲目は「アメイジング・グレイス」「夏の童謡・唱歌メドレー」のほか福島ゆかりの高村光太郎「智恵子抄」から中島はる作曲「人に」を歌っ



上は歌う山澤さんと伴奏する牧原さん 下は会場



写真提供 自然保護委員 広田 博

た。現在闘病中の中島はるさんとも、せめて一緒に旅にしたいということで演目に加えたもの。箏・フルートの合奏は宮田耕八朗作曲「キビタキの森」。キビタキが福島の県鳥ということもあって、古里に生きるすべての生きものの平安を祈る思いだった。

福井緑さんは福島のりよ作の童話、東日本大震災ものがたり「犬のラメ」を一人芝居で演じてくれた。震災で離ればなれになった犬が、ローズマリーの香りに誘われて飼い主の少女と再会する話である。作者の福島のりよさんが、わざわざ埼玉から駆け付けてくださったのも嬉しかった。古賀政男の名曲「影を慕いて」の伴奏とともに、一人芝居をひきたててくださったのはマンドリンの岩崎早苗さんである。彼女は東北の旅に申し込んでこられたのを、これ幸いと一役担ってもらった。

「野口英世の母」(作詞・寺田邦昭 作曲・中村守孝)、「心母」(作詞作曲・石坂まさお)は山澤直子さんの持ち歌である。特に前者は母シカの

手紙の朗読と共に、心のこもった歌を聞かせる。彼女自身、野口英世の出身地猪苗代でコンサートができることを楽しみにしていた。最後は石川啄木・作歌 越谷達之助・作曲「初恋」を箏・フルートの伴奏でみごとに歌い上げた。アンコールには翌日の「尾瀬集会」の成功を祈って「夏の思い出」を全員で歌って「支援の夕べ」は無事に終わった。

翌日は、7時30分にバスに乗り込み、ここで別れる出演者や渡辺豊記者、佐藤淳志夫妻らに見送られながら一路、尾瀬戸倉に向かって急いだ。「走れメロス」さながらのハードな行程だったが、会津に残った人々は思い思いに旅の終わりを楽しんだらしい。皆さん、どうも有難う。

後で聞いた話によれば山澤直子さんは、秋に猪苗代で開催される「野口英世」を顕彰する大きな催しに招かれたとか。これも嬉しい話である。若い世代の活躍に期待したい。(8・21)

尾瀬に最初に足を踏み入れたのは、大学1年の冬であった。メンバーは5名。ぼくたち山岳部員4名と、どういいういきさつだったか忘れてしまったがイギリスの若い現役航空隊員が一緒という組み合わせだった。あの時は、テントひと張りトスキーをもって富士見口から入山し、最初の日は富士見峠で泊り、翌日スキーで尾瀬ヶ原に下って尾瀬沼に出て、それから黒岩山、鬼怒沼山をたどって奥鬼怒温泉峡に下り、さらに根名草山や丸沼などを経て金精峠に至り、日光湯元に下るといふ長丁場だった。スキーは滑るといふよりほとんど歩く道具だった。尾瀬沼の上をスキーで横断したこと、山中は大半が樹林帯で、地図と磁石と獵師が残したナタ目頼りの歩行だったこと、雪の日光沢温泉で星を眺めながら無料温泉に浸かったこと、根名草の登りがばかに急峻だったこと、やっと金精峠にたどり着いて鎮座して元気に天を仰ぐ金精様たちを眺めながら急に人里が恋しくなったことなどが今でも鮮明に思い出される。

それから半世紀、どれくらい尾瀬に入ったことか。学生時代は元気が有り余っていたから、たまのサブザック歩きが嬉しくて、友人とふたりで三平峠、尾瀬沼、燧岳、山の鼻、鳩待ち峠をぐるぐると一日で駆け抜けたこと、晴天に恵まれた4月、山の鼻にテントを張って至仏山を上半身裸でスキー滑降したこと、まだ尾瀬が禁漁になつていなかったあの頃、ひとり岩魚釣りに入って小屋の囲炉裏端でオヤジが釣ってきた大物揃いの釣果にビックリ仰天、つぎの日教えてもらったヨッピー川にわけ入って悠々と泳ぐ魚を眺めながら一尾も釣る事が出来なかつた悔しい思い出、秋も深

まった10月下旬会社の女性たちと一面草紅葉の原を歩いて三条の湯から渋沢温泉に下り全山紅葉の中を渡し舟で奥只見湖を渡った夢のような3日間のこと、家族で歩いた夏の尾瀬など等、尽きることのない思い出が走馬灯のように脳裏を駆けめぐる。

ぼくに日本の山の中で何処が好き?と問われたら、迷うことなく尾瀬と屋久島と上高地の名前を挙げるだろう。ほかにも沢山好きなところはあつたけれど、結果として何回も何十回も繰り返し通いつめたところが本当好きな山なのだろうと思う。

歴史をひも解くと、過去幾たびか尾瀬の自然保護を廻つてのエポックメイキングがあつた。その中でも忘れてはならないのは、戦後復興の時期、国策としての電源開発から尾瀬の自然を守ろうと立ち上がった尾瀬保存期成同盟の人たちの活動と、スパー林道をストツツさせるため立ち上がり遂に時の環境庁大石長官の心を動かして中止を言わしめた平野長請さんらの執念の活動のふたつである。尾瀬が日本の自然保護の原点と言われる所以である。

これら先人の努力で今日まで守られてきた尾瀬であるが、その類稀な美しい自然に触れようとする人山者はピーク時年間60万人にも達し、それにあわせて登山道やトイレ、宿泊施設などが整備されてきた。近年はネーチャイガイドの育成にも力を注ぐようになってきている。

そんな尾瀬が、3・11以降、管理のあり方で揺れ動いている。尾瀬の土地の40%を所有する東京電力が近年尾瀬の管理のために計上してきた予算は木道の整備などに2億円その他を入れると年間4億円ともいわれている。それがあの福島第一発電所の事故により実質国有化に追い込まれる事態になり、今後同規模の出費は困難になった。東電は、引き続き

尾瀬の土地は持ち続けることを表明、管理については、とりあえず1億円程度に減額して、引き続き責任を負うということと今年も落ち着いたようである。

本件については、山岳団体自然環境連絡会でも環境省あて意見書を提出した。また、今年自然保護全国集会でもメインのテーマとして議論された。内容の詳細については木の目草の芽98号、99号に詳しいので、本稿では、ぼく一人の意見を述べておこうと思う。

そもそも、自然が自然であるかぎり管理などというものは、不必要である。大勢の人たちが入山するから管理が必要になる。武田久吉さんが尾瀬を歩き回っていた頃の尾瀬に還ることができたら、そんなものは不要ということになるが、それができないから、いまま如何に自然に対するインパクトを少なくするかが問題になり管理が必要になるのだと思う。

さて、国立公園は自然の「保護と利用」を目的として国が制定しているのだから、東電が実質国有化におちいつている現在、尾瀬の所有も完全に国のものにして、国自らがインシアチブを取って国立公園の目的にあつた管理をおこなうのが筋であろう。そもそも国立公園の核心部に当たる40%の土地が企業(それも国策的企業の私物)になっており、そこが管理の主体になっていること自体好ましいことではない。この際、この構図自体を精算して、その上で、過剰で集中的な利用が自然にダメージを与えないよう入山者の地域的時期的分散化と絶対人数の抑制を図る手段を考へること、入山者に対しても受益者負担の観点から一定の金銭的負担を求める対策を講じるなどの手を奮勇をもって実施すべきである。山岳団体の自然保護担当者や尾瀬の全国集会に参加した岳人たちの過半が、同じことを考えているのを知って、わが意を得たりと思つている。

◆お願い◆

緑爽会は自然保護委員会OBによってスタートした同好会です。これからも協力できることは、進んで提携をして行きたいと思ひます。

また、委員会報「木の目草の芽」が近く100号を教えます。91号から、編集は元川里美委員に交替。これまで長く関わって来た近藤は、やっと肩の荷を下ろした気分です。

ところで、100号を契機に、「木の目草の芽」を購読していただいませぬか。「緑爽会報」と合わせて読んでいただけると、自然保護の現状がよくわかります。年間購読費1000円。申込みは、川口章子(0974638721)まで。

——編集後記——

残暑お見舞い申し上げます。

★立秋も過ぎ、まもなく9月になるといふのに、居座つた夏は勢いを増すばかり。救急車のサイレンを聞くたびに、すは、熱中症かと緊張します。群馬・埼玉の暑さは、内陸で涼しい海風の入らないところへ、大都会の熱気が南風に乗って吹きつけるためだとか。これまで「沖繩に避暑に行く」と笑つていましたが、今年は羽田に到着した機内アナウンス第一声が「東京は気温33度、那覇より暑いようでございます」でした。★自然保護全国集会が終わわり、緑爽会の暑気払いが終わつた後、怠けていたら会報の原稿がない。大慌てで作成した7・8合併号です。緊急なお願ひに協力して下さった方々にお礼申し上げます。★会報は皆さんのもの。いつでもご寄稿をお待ちしています。山行報告・紀行文・エッセイ・書評など、なんでも気軽に送ってください。お待ちしています。★緑爽会員年会費1500円、また、緑友(会員外)会報購読料1000円、未納の方はどうぞよろしく。★緑爽会報の編集も後継者を考えなくてはなりません。いくらやりたくても出来ない時がくる前に、いつもそのことが頭にあります。(近藤)